

<インタビュー構成>

## 明大図書館の至宝ウィット・ライブラリー 97年度購入特別資料

森 洋子<sup>E</sup>

聞き手 / 後藤 総一郎<sup>E</sup>

### ロンドンのウィット・ライブラリーを訪れる

後藤 夏休みにロンドンのコートルド美術研究所にあるウィット・ライブラリー（The Witt Library）を見に出かけられたんですってね。

森 明治大学の昨年の特別資料として、ウィット・ライブラリーのマイクロフィッシュを購入していただき、それが今年5月、生田の図書館に届きました。それから私はほとんど毎週、時間をつくっては図書館に入り浸りという感じです。内容は12世紀から現代まで、世界23カ国の5万人の画家の作品180万点がマイクロフィッシュに収録されているという、素晴らしいものです。美術史だけでなく、文学、社会史、民族学などの多分野の研究に必須の美術資料といえるでしょう。一緒に申請



<sup>E</sup>もり・ようこ / 理工学部教授 / 西洋美術史

<sup>E</sup>ごとう・そういちろう / 図書館長 / 政経学部教授 / 日本政治思想史

した先生方にもご案内したり、若い助手の方にも「ぜひこれを使ってください」と、一生懸命PRしているところです。奇跡のような貴重な資料が身近にあるので、これからもっと私自身の研究を深めたいと思っています。

後藤 日本で明治大学以外に、このセットを所蔵している研究機関があるのですか。

森 上野の国立西洋美術館だけです。私はこれからの利用の仕方ということもあり、マイクロフィッシュ化する前のオリジナルの図版および写真コレクションのあるウィット・ライブラリーで現状をよく把握するため、ロンドンに行ってきたのです。とくにウィット・ライブラリーの成立と歴史、研究上のさまざまな活用方法とこれまでの「特種」的な研究成果、マイクロフィッシュ化した事情などを知りたいと思いました。

ウィット・ライブラリーは(写真)ロンドン大学のコートルド美術研究所(Courtauld Institute of Art)内にあるのですが、夏休み中にもかかわらず、幸い館長ジョン・サンダーランド博士、利用者アドヴァイスしておられる研究員アンシア・ブルック博士、マイクロフィッシュを出版したジム・エメット社長にお会いできました。またちょうどライブラリーで調べ物をしていたササビーズ社の社員にもインタビューできました。このように関係者の皆さんからお話を伺ったので、明治大学の研究者や大学院の学生さんだけではなくて、日本全国の研究者の方々に、もっと詳しく、その利用価値についてお伝えしたいと思っています。

後藤 前にもウィット・ライブラリーへ行かれたことがあると伺いましたが、変わっていませんでしたか。

森 昔、訪れたのは、ロンドンのポートマン・スクエア19番地(Portman Square)にあったときのコートルド美術研究所でした。何分、そこにあるウィット・ライブラリーは3階建の個人住宅の中にあり、小さな部屋がいろいろあって、目的とする写真を探すのに、階上へあがったり、階下へ降りたり、くるくる目が回りそうだったのを記憶しています。膨大な写真資料の箱が数室にわたって、床から天井までびっしり壁面の棚に収められ、それは圧巻でした。個々の箱の大きさは縦が少し短いA3サイズで、厚さ7センチというかなり大きなものです。国別、流派別に分類してある場所

に慣れるまで数日かかりました。近年、ウィット・ライブラリーはロンドンのテムズ川に近いストランドに新築された研究所に移され、非常に使いやすくなったという話を聞いていました。ですからぜひ、新しいコートールド美術研究所の様子を見たいとかねがね思っていたわけです。

## ウィット卿夫妻について

後藤 先生がロンドンに行かれ、ウィット・ライブラリーの歴史について、なにか新しいお話を関係者から伺われましたか。

森 今まではライブラリーの創設者がロバート・ウィット卿 (Sir Robert Witt) という以外、ほとんどウィット卿ご夫妻のプロフィールについては知りませんでした。今回、ライブラリーの壁に掛かっているグリーン・フィリポット作による2点の肖像画、つまりイギリス紳士らしい知的で上品なロバート・ウィット卿 (1922年ナイトの称号を授与) の肖像とメアリ夫人 (Lady Mary Witt) の夢みるような表情の美しい肖像を見て、お2人についてのエピソードを調べてみたくなりました (写真)。そこでサンダーランド館長さんに、「何かウィットご夫妻のお人柄が分かる資料がございませんか」とお願いしたところ、1927年8月3日、『ザ・クイーン』という一種のファッション紙に掲載されたウィット夫人の長いインタビュー記事を見せていただいたのです。これによりますと、お2人はオックスフォード大学で、美術史や歴史を勉強し、たまたま美術の図版を集める趣味といたしますが、関心を共通に持っていたのです。メアリさんのほうは、春休みにイタリアへ旅行して、たくさん絵葉書を買ったり、現地で売っていた図版を集めたりしました。ロバートさんの方は、オックスフォードでいろいろと資料を入手しました。ある時、友達が「2人で集めているのなら、結婚すれば倍になるじゃないか」と言ったそうですが、お2人は本当に結婚することになったのです。若かった新婚カップルは当初、小さなアパートで生活を始めましたが、美術資料の方はまだ居間の書棚いっぱいになるくらいの量でした。それからも2人は熱心に収集したので、資料はたちまち、アパートにあふれ、やがて小さな家へ移ったそうです。客間をキャビネ・デチュード (Cabinet d'tude) に改造しましたが、その家も図版資料で部

屋という部屋が埋め尽くされました。1920年代のことでしたが、彼らは、すでに1200年頃から1850年までの、8千の芸術家、15万枚点の資料を収集できたのです。このことは大変な意味がありました。というのも、当時は図版の豊富な美術書やカタログはあまり出版されていなかったため、美術史研究とはまず画家の作品をできるだけ多く知ることから始まったからです。

ウィット卿はまもなく、収集した資料を一般に公開するためにも、もっと大きな家を購入することにしました。それがポートマン・スクエアNo. 32の家でした。ウィット氏の職業は法廷弁護士でしたが、このほか、ロンドンのテート・ギャラリーやコムプトンのウアッツ軍事博物館の評議員を歴任し、やがてナショナル・アート・コレクション・ファンドのチェアマンという要職にも就かれました。私がとても素晴らしいと思ったのは、彼がその収入のすべてを図版や写真資料のコレクションのために捧げたことです。1927年のインタビューの記事の室内写真を見ますと、豊かな知識人の家のインテリアらしく、大理石の暖炉があり、床には素晴らしいペルシャ絨毯が張られ、棚には中国製の花瓶が飾られていました。しかし部屋の壁一面に、図版や写真資料の入ったボックスが並んでいるところは、普通の上流階級の邸宅と異なる点でしょう。事実、ご夫人は日中、仕事のあるウィット卿は毎晩、しかもウィークエンドも日曜日もなく、台紙に絵葉書、普段はなかなか入手できない、地方都市での展覧会カタログの図版から、世界各地で行われたオークション・カタログを、来歴、記述、解説などの文字データも一緒に添付したのです。例えば、1857年にマンチェスターで開催されたArt Treasure Manchesterのような古い展覧会カタログが台紙に貼られ保存されると、当時イギリスで評価されていた画家についての具体的なイメージを得られるだけでなく、この時代の趣向も把握できます。この他、個人コレクションの写真資料は歴史的に貴重です。というのも、長い年月の間に売却されたり、不幸にも戦火で逸散したりすることもあり、その時、記録しなければ、永遠に所在不明になる作品もあるからです。さらに新聞から美術雑誌、総合雑誌にいたるまで、しかもいつ廃刊になるかも分からない雑誌も含め、作品の購入や新発見のニュース、真贋問題、修復記録その他さまざまな情報をファイル化することは、研究者に

とってまさにオリジナル研究への道が開かれます。また世界中の研究機関や美術館、今日でいうファブリヤスカーラ社といった類いの美術写真社からも積極的に図版資料を購入しました。分類の仕方でも作品の多いルーベンスなどは、宗教画、神話画、風景画、肖像画などジャンル別にしたとのこと。ウィット夫人は息子のジョンさんが幼いころから、これらの資料は彼の教育のためにも意義あると思われたそうです。

やがて彼らは歴大な年月を費やして作成した写真コレクションを一般に公開することにしました。というのも、こうした特別の資料は公共の図書館でも、研究者だけにしか利用させない場合が多かったからです。確かに現在でも、ロンドンの大英図書館、ウォバーク・インスティテュートとか、ニューヨークのフリック・コレクション内の図書室では、研究者でさえ、前もって許可を申請するという閉鎖的な世界ですね。そこでもっと気軽に、一般の人たちが自分の美術品コレクションについて調べるとか、購入を考えている作品について予備調査ができるようにと、自宅を開放したのです。「どなたでも自由にいらしてください」と大変、寛大なご夫妻の態度に、世界中の人々が彼らのコレクションを利用しに訪れました。ある年の11月の最終週でさえ、フランス、スペイン、ノルウェー、イタリー、オランダからの訪問者がやって来ました。

ウィット卿の弁護士の仕事が忙しくなると、息子のジョンさんも手伝われ、親子2代にわたる収集活動となりました。やがて1人を雇い、分類の仕事を手伝わせましたが、規模が大きくなってからは、5人のアシスタントがいたそうです。今日世界中の人々によって利用されているウィット・ライブラリーも、このような手作りの歴史から始まったということを知って、本当に感激しました。「資金を寄付するから、こういうコレクションを作りなさい」といった提案ではなかったのです。ウィット卿は自らも

How to look at Pictures, **London 1906**

One Hundred Masterpieces of Painting, **London 1910**

などのほか、ウィット・ライブラリーのカタログ2巻を出版しています。

## 絵画の写真コレクション

後藤 なぜウィット卿夫妻はそこまで熱心だったのでしょうか。自宅を解放するということは、実際は大変なことですね。

森 それには学としての美術史に対するイギリスの歴史的背景が関連しています。そもそも美術史という学問が認知されたのはドイツが最初で、19世紀の終わりごろのことです。しかしイギリスではかなり遅く、1920年 - 30年ぐらいからといわれています。それまで美術史はコレクターや愛好家たちの趣味的な範疇で扱われていたのです。そうした状況はよく理解できます。戦前の日本でも西洋美術史といえば、お金持ちの子息がヨーロッパに遊学し、習得する道楽的な学問と思われていました。そこでウィットご夫妻は、イギリスで学としての美術史のレベルアップしなければならないと自覚され、それには専門家だけでなく、一般の人たちの美術史の教養を高めるために、資料の公開を考えたのです。イギリスの伝統的な啓蒙主義が彼らの中に根強く残っていたのですね。

ロバート・ウィット卿が1952年に他界されたあと、遺言によってこのコレクションはコートールド美術研究所に寄贈されました。と同時に、同美術館も同じポートマン・スクエアの19番地に引っ越しました。この時から今日までの半世紀間に、約10倍近い量の180万点の図版・写真資料になったのです。

後藤 現在のウィット・ライブラリーの内容とか活用のされ方を聞かれ、どうでしたか。

森 ウィット卿夫妻が自宅を公開した時からの伝統が残っていて、現在のウィット・ライブラリーも、無料で一般に公開されています。研究者や美術史家だけではなくて、画商、サザビーズやクリスティーズなどのオークション関係者、学生、一般のコレクターなど、専門家や素人の方々も、自由に利用できるのも、羨ましいかぎりです。しかもこの研究所では、専門の研究員がいろいろと研究や調査の相談に乗ってくださったり、アドバイスをしてくれます。たとえば、一般の人が自分の家にこうゆうコレクションがあるのだけでも、もう少し内容を調べたいというと、研究員がどんな写真と比較したらよいかを指導してくださるのです。

現在の構成はカラー、モノクロ写真、図版など画家別に、1つの箱に数十枚から最大で200枚前後という単位でまとめられ、全部で6000箱以上あるでしょう。2フロアにわたって壁という壁にグリーン色の箱が書籍のように所狭しと並べられています。

## ウィット・ライブラリーのマイクロフィッシュ化

森 ともかくこれまでは、ウィット・コレクションを利用するのに、ロンドンまで出掛けていかなければならなかったのです。それが今やマイクロフィッシュでも研究できるのでから、日本にいながらにして、さまざまなデータによる作家研究ができ、素晴らしいことです。しかも今回、ロンドンで色々な方からウィット卿夫妻のご苦労について知ったので、これからマイクロフィッシュを利用するにしても、特別に感謝の気持ちも沸いてきます。このマイクロフィッシュ化というのは、アメリカのゲッティ美術館からの約2千万円の資金的援助によって、1979年から82年にかけて行われたそうです。最初に作った8セットすべてを売却した後、ウィット・ライブラリーはマスターのフィルムのコピーライトをエメット社に譲渡したのですが、同社はこのマスターからより優れた技術でマイクロフィッシュのコピーを制作し、世界の計27カ所（現在のところ）の一流の大学、美術研究所、美術館に売りました。したがって明治大学が購入したのは、マスターからのコピーですが、初期のものよりは画質がよいとのことでした。

## ウィット・ライブラリーと学生たち

後藤 このライブラリーが現在、ロンドン大学のコートールド美術研究所の管轄下となると、学生にはどのようにして利用方法を指導しているのでしょうか。

森 学生さんは当然、ウィット・ライブラリーに自由に入ることができますが、とくに館長とブルック博士が毎学期に、2日か3日間にわたって、カリキュラムの一環としてウィット・ライブラリーの利用について授業されておられるそうです。ブルック博士からのご好意によって、講義録のコピー

をいただきましたが、コレクションの歴史とか内容だけでなく、研究者になるためのリサーチ・ガイダンスから、利用者の心得や写真の注文など、具体的な手順にいたる指導が行われます。たとえば現在では、17世紀のフランドルの画家ルーベンスに関して30箱もありますが、そういった場合、宗教画、歴史画、風俗画、肖像画、風景画などの分類、しかも肖像画では単独・グループ・家族像とか、全身か半身像か、また手が描かれているもの、描かれていないものといった分類について説明されます。

## ゴヤ《黒い絵》の原画について

後藤 ウィット・ライブラリーの美術史上の貢献とか最近起こったトピックなどありますか。

森 スペインの画家ゴヤは大変有名なので、イギリスでもちょっとした図書館に行けば、各種の画集を手にとることができます。しかし、ゴヤが後年、マンサナレス河近くに別荘（「聾の家」と呼称された）を購入し、その食堂とサロンの壁面に油絵の具で描いていた《黒い絵》シリーズは、現在、ウィット・ライブラリーに保存されている写真なしには、正確に研究できないでしょう。といいますが、ゴヤの死後、「聾の家」の所有者デルランジェー男爵が壁面からキャンヴァスに移しかえさせたとき、壁面の顔料がはがれ、かなり破損しました。したがって、現在、プラド美術館に展示されている《黒い絵》シリーズは、そのときの修復の手（主にリタッチ）が加わったものなので、ゴヤの原画とは微妙に異なっているのです。しかし幸い、ウィット・ライブラリーには、壁面から剥がす前のオリジナルの状態の写真が保存されているので、ゴヤ研究にとっては必見の資料となるのです。

最近のトピックスとしては、第2次世界大戦前、ハンガリーの金持ちが自分のコレクションをイギリスのある場所に預けたのですが、戦後、ハンガリーが社会主義国になったため、連絡も途絶えた状態になってしまいました（もちろん、彼のコレクションがハンガリー国内にあったら、政府に没収されていたでしょう）。この人がコレクションの安否が確認できないまま、イギリス政府はそれをナチの略奪品と勘違いして、売却してしまっ

たのです。近年、政情も安定したので、コレクターが返却手続をとったころ、このアクシデントを知り、問題になりました。結局、イギリス政府に対して裁判で賠償を求めたということです。そのときの証拠がウィット・ライブラリーの写真資料でした。この事件は新聞とかテレビでも報道されましたが、結局、このハンガリー人は勝訴したそうです。

もう一つホットなニュースというのは、カラヴァッジョの作品の真贋事件です。17世紀のイタリアを代表するカラヴァッジョの作品ともなると、世界中の美術館の垂涎的ですが、アイルランドのナショナルギャラリーがこの画家の《トランプ遊び》を購入しました。それについて新聞が報道するや否、同じヴァージョンを「私も持っている」という声があちこちから出されました。アイルランドの美術館が買ったのは贋作かコピーではないかなど、大騒ぎになりました。しかしウィット・ライブラリーに、1890年代にオリジナルから撮影した写真があって、それがアイルランドの美術館の作品と一致したので、当事者たちは、ほっとしたそうです。購入する前に、ロンドンまで行けなくても、せめてこの美術館にマイクロフィッシュがあればよかったですね。しかし皆がこの結論に満足したかどうかは別問題という「おまけ」がついているのですが。

## 歴史や民俗史の資料としても貴重

後藤 そうすると、先生が今までされてきた研究、例えば、ブリューゲルについての何冊かの著作を読ませてもらったのですが、このウィット・ライブラリーもフランドル地方における民俗史、あるいは農民の生活史というリアルな形で我々の研究材料になります。一族にはブリューゲルという名前の画家は何人もいたのではありませんか。

森 現在知られているだけでも11人います。実は1988年に、『ブリューゲル全作品』という本を出版するとき、とても苦労しました。父ピーテル・ブリューゲルや息子2人、孫3人と孫娘の夫、曾孫3人という風に、一族の画家について紹介しようとしたのですが、孫や曾孫の作品に関するデータが十分ではありませんでした。わたしはまだウィット・ライブラリーを利用するということを思いつかなかったのです。というのは、フランドル

の画家たちのことは、ベルギーで調査できる、と思ったからです。ところがこの夏、ウィット・ライブラリーで念のため、ブリューゲルの一族の中で、一番、作品のデータ集めが難しかったアンブロシウスやアブラハム・ブリューゲルの箱を出してみたら、私の知らない作品がかなりあってショックを受けました（笑）。もちろん、近年のオークション・データも入っていたのですが。実はウィット・ライブラリーではエメット社によって10年ごとに新しいデータをまとめたマイクロフィッシュが作られています。最新版は1992年に、10 YEAR UPDATE 1981-91が発行されています。

いま後藤先生がおっしゃった農民の生活史についてですが、絵画資料から研究しようとする、このウィット・ライブラリーでは、農民画や農村風景画を描いた画家の名前を知っていれば、作品について広範囲な調査ができます。しかし主題、図像、題材、地誌から写真を探するのは、もう少し待たなければなりません。ゲッティ財団の援助で1984年1月から、ウィット・ライブラリーのコンピュータ・インデックスが作成されており、約15年間で漸くアメリカン・スクール（流派）が終わったところです。例えば、わたしがこの10年近く研究している「シャボン玉の図像学」というテーマですと、現在ではまだシャボン玉を描いた寓意画、風俗画、静物画、肖像画などを、インデックスからいっぺんに分かるというわけにはいきません。データ・ベースとして全体が完成するのはかなり先のことになるでしょう。

後藤 文化人類学とか、民俗学でいうと、イギリスの人類学者フレーザーなどの『金枝篇』には、やはり挿絵が入っているんですが、柳田などは、そういうのを明治40年代に読みながら、神が木に宿るといような信仰みたいなものがヨーロッパにあることを知り、それはやはり日本の信仰の中心に持ってくるような方法論を学ぶわけですよ。図像学というのは、どんな学問にとっても大切ですね。だから、例えば、18世紀というと、宝暦年間から文化・文政までの時代の、書かれた民俗ってないでしょう。ところが、菅江真澄という民俗史家は、伊那谷から、特に東北、秋田に何10年と住んで、『菅江真澄遊覧記』という民俗史を文字で書くんです。それに全部スケッチが入っているんです。秋田の天保年間の正月はどうだとか、歳取の魚はどうだとか、ナマハゲはどうだとか、そういうのを描いている

から、文字で書かれた民俗の歴史とスケッチが入っているということで、実に貴重なものとして、柳田国男はそれを紹介をし、復刻するんです。

私たちは、そういう視点で、つまり文字で書かれなかった場合には絵であったり、あるいは写真であったり 写真はまだないのですけれども、そういう意味で、先生の研究されたブリュゲルの絵画にしてもそうだし、今度のウィット・ライブラリーにしても、貴重な同時代の資料形態として、歴史や文学にも使えるのじゃないかと思うのです。

## コンウェー・ライブラリーの80万枚の写真のコレクションの威力

森 ウィット・ライブラリーのサンダーランド館長さんと話しているうちに、コンウェー・ライブラリー（The Conway Library）について紹介されました。館長さんは、「せっかくウィット・ライブラリーのマイクロフィッシュを明治大学が所蔵しているのなら、コンウェー・ライブラリーもぜひいっしょに購入されたら、研究資料としては完璧ですね。大抵の研究機関は、ウィットとコンウェーを一对と考え、揃えていますね。」と推薦されました。そして同じコートールド美術研究所の建物内にあるコンウェー・ライブラリーを案内していただきました。

本当にびっくりしたのは、ウィット・ライブラリーはいま申し上げたように、絵画資料が180万点というスケールですが、コンウェー・ライブラリーの方も全体で80万点もあるのです。内容はフランスとイタリア建築が17万点、その他の国々が18万点、建築の構想デッサン5万点、彫刻16万点、彩色写本11万点、中世美術（ステンドグラス、壁画、象牙細工、印章）11.5万点から構成されています。とくに建築といってもフランス、イタリア、イギリス、ドイツといった建築大国の他に、アルバニア、アンドラ、ベルギー、チェコスロヴァキア、デンマーク、フィンランドなど46カ国を網羅しています。

このライブラリーは当初からエメット社が写真家を雇って、ハイテクの技術でマイクロフィッシュを完成させたそうです。エメット社長は長年、オーストラリアの大学の図書館で司書として働いておられた方です。そのと

き、何が図書館で必要なのかという実体験から、できるだけ広範囲な分野をカバーし、しかも空間的な制約の少ない資料、つまり、マイクロフィッシュの出版こそが彼の生涯の課題と決心したそうです。

後藤 時代はどうか。

森 写真は19世紀以降のものですが、対象になっている作品は2500年の歴史を語っています。建物の場合、建築の外観や内部とその部分、また平面図、立面図などのプラン、道路をも含めています。エメット社長によると、コンウェー・ライブラリーの場合、ロンドン大学の美術史専攻の大学院生たちの協力を得て、利用者としての経験を編集に生かしたということです。ウィット・ライブラリーのマイクロフィッシュでは、流派別、箱の通し番号順だったので、探しにくいこともあるのですが、それらの反省を生かし、コンウェー・ライブラリーでは、例えば、建築ですと、都市のアルファベット順、宗教建築、世俗建築、そして外観から内部へと分類し、また彩色写本の場合、地名のアルファベット順に所蔵機関を探すことができるのです。いずれの分野もコンウェー・ライブラリーは、5年ごとに新しいデータをマイクロフィッシュに収め、出版しています。

## コンウェー氏について

後藤 コンウェーさんはどんな人ですか。

森 ウィリアム・マーティン・コンウェー卿 (William Martin Conway, 1856-1937)、一般にはコンウェー・オヴ・アリントン (Conway of Allington) として知られてますが、ケンブリッジのトリニティ・カレッジで美術史を勉強されました。後にリヴァプール大学やケンブリッジ大学で教鞭をとられた後、ロンドンの帝国軍事博物館の館長に就任。彼の美術史関係の著作には

Early Flemish Artists, London 1887

Literary Remains of Albrecht Durer, Cambridge 1889

The Van Eycks and their Followers, London 1921

など、ひじょうに多くあります。コンウェー卿もひじょうに熱心に美術関係の複製画や資料写真を集め、1932年、それらと新たに購入した写真資料を合わせ、10万点をコートルド美術研究所に寄贈しました。現在のコンウェー・ライブラリーはそれらを土台に充実させた図版および実物写真コレクションです。

この他、コンウェー卿は非常に興味深いキャリアの方で、探検家、登山家だったら、彼の名前を知らない人はいないほどでしょう。バルトロ氷河踏査のほか、ヒマラヤ、アルプス、ポリヴァイ、アンデス山脈などを登ったことで著名な方です。卿の称号は登山家としての業績なのです。ここでは列挙しませんが、登山関係の著作も少なくありません。さらに

Joan Evans, *The Conways, a History of Three Generations*,  
**London 1966**

といったコンウェー家三代の伝記まで出版されています。

後藤 ウィット・ライブラリーもコンウェイ・ライブラリーもそれぞれ10年置きと5年置きに新しいデータを出版するのは、つねに大変なりサーチが必要とされますね。

森 現在、ウィット・ライブラリーでは5人、コンウェー・ライブラリーでは3人の研究員が常勤しています。そして新聞、雑誌、展覧会および美術館の常設カタログ、オークション・カタログ、個人コレクションなど、新しい資料をファイリングしています。しかもいまや世界中の人々が協力して、新しい資料をライブラリーに寄贈しているそうです。明治大学でも、刑事博物館や考古学博物館での展覧会カタログをぜひ送っていただきたいと思います。

後藤 ウィット・ライブラリーもコンウェー・ライブラリーもこれから活用の仕方によって、素晴らしい研究ができそうですね。美術資料というのは、ある意味では、時代のドキュメントともいえますからね。生活史が見えることもあるし、そこから精神史を見ることもできる。

森 城、宮殿、あるいは個人の家でも、内部写真をみると、どんな生活をしたのかとか、壁にどんな絵が掛かっていたか、どんなコレクションをど

んなふうに置いていたか、また教会でも祭壇画や彫刻はどこに置かれていたのか、市庁舎の大広間にはどんなフレスコ、タピストリーが掛かっていて、どんなテーマだったか、今日から想像できないような情報が伝わってきます。火災や戦争で破壊された建物が多いなか、19世紀の写真はとくに重要ですね。

私にとってとくに魅力的なのはコンウェー・ライブラリーの彩色写本のコレクションです。中世美術史だけでなく、歴史、社会史、文学史、生活文化史などにとって写本文化のもたらす資料的価値は大変なものなのです。時禱書のカレンダー頁には、1月の宴会、4月の森の遊策、5月の鷹狩りなどの貴族の年中行事、その他の月の農民の野良仕事、例えば、羊の毛刈り、干し草や穀物の収穫、種蒔き、豚蓄殺のといった内容で、農具や農耕の技術など、ひじょうに写実的に描かれ、素晴らしい歳時記の世界が展開しています。

大学にいと、オークション情報から疎遠になりがちですが、ウィット・ライブラリーやコンウェー・ライブラリーを見ていると、かつての新発見の彩色写本とか絵画など、思いがけない資料に出会い、研究の助けになります。かつてブリューゲルの《ネーデルラントの諺》について研究したことがあります。ファクシミリ本が出版されていないときは、とくに実際に訪れないと全貌の分からない大英博物館やオックスフォード大学のボードレアン・ライブラリー所蔵の時禱書などに、マイクロフィッシュで見られるのは、大変助かります。写本の余白ページに描写された諺を通じて、当時の民衆の精神構造を読むことができます。

後藤 そういう素晴らしいライブラリーについて、特に先生など中心になって、その価値について解説してくださるといいですね。

森 近い将来、大学がコンウェー・ライブラリーの購入もご検討くだされば、皆様のご研究にとってどんなに役立つでしょうか。また大学院に毎年新しい学生さんが入られますが、マイクロフィッシュを使ってのオリジナル研究の可能性についてぜひご紹介したいと思います。

後藤 公開講座なんかで、研究者や学生さんに、何回か具体的に映像を見せながらのお話をしてもらうのもいいかもしれないですね。そのうちに1

冊にまとめて…。

森 結局、ウィット卿夫妻もコンウェー教授にしても、自分だけのためではなく、一般の利用者のことも考えながら、長年、努力と情熱をもってコレクションを充実してこられたのですね。彼らの貢献によって今日の私たちの研究が随分、進展できるわけですから、こうした恩恵に報いるためにも、ぜひコンウェー・ライブラリーを明治大学に備えていただきたく、熱望します。日本中の研究者に、「ロンドンまで行かなくとも、明治大学でどうぞご利用してください」とPRしたいですね。

いずれにしろ、ウィット・ライブラリーの場合は10年おきに、コンウェイ・ライブラリーの場合は5年おきに追加されたデータが出版されますから、これからも購入を継続していただきたいと思っております。

## ショート・インフォメーション

### 1. ウィット・ライブラリー (The Witt Library) の所在地

è Courtauld Institute of Art, Somerset House, Strand, London WC2R 0RN U.K.

è Phone 001/44/171/873/2745

è Fax 001/44/171/873/2772

è マイクロフィッシュの内容：180万点の絵画・素描作品の写真および関連データ（サイズ、材質、来歴、内容に関する記述と解釈など）

è 最近の10 YEAR UPDATE 1981-1991

### 2. コンウェイ・ライブラリー (The Conway Library) の所在地

è 住所、ウィット・ライブラリーと同じ

è マイクロフィッシュの内容：80万点の建築・その構想スケッチ・彫刻・彩色写本・中世美術の写真および関連データ

è 最近の5 YEAR UPDATE 1987-92

3. マイクロフィッシュの出版社

è Emmett Publishing Ltd.

è Glenthorne, Hill Road, Hindhead, Surrey GU26 6QN U.K.

è Phone/Fax 001/44/1428/609099